

---

# 激情

マクスウェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

激情

### 【Z-ONE】

Z2800M

### 【作者名】

マクスウェル

### 【あらすじ】

恋愛小説です。

よろしくお願いします m(—\_—)m

## 序

部屋を掃除していました  
叔父が生前書きためたノートが数冊  
埃を纏つて出てまいりました。

埃を払い恐る恐る  
ページを開きますと：

思いもよらない驚きがありました。

自分の名前が記されていたからです。

この物語を『夏海』に捧ぐ

『人生は宝箱  
何が詰まっているか  
開けてみるまで  
わかりません』

この物語はフィクションです。

『序』

人は皆、愚かしい生き物です。

他人どころか自分さえも  
信じられない時がある。

人は人なりに痛みや苦しみを抱えています。  
一度も失敗した事のない人なんていません。

おそらく人は愚かでなければ

何も生み出せない生き物なのです。人だから辛抱できない事もあります。

しかし、人は泣くだけ泣いた後、  
必ず立ち上がり、歩き出す生き物です。

人の強さと善意を歌い、人を信じ、人を愛し、  
未来を信じて歩き出す生き物なのです。

おそらく、きっと、そのようにして  
新たな物語がはじまるのです。

母と子を繋いだ縁を  
断ち切るよう…。

私がはじめて「遠子」と話したのは文化会館のロビーに立つ女神像の辺りでした。

音楽家をやつていながら音楽コンサートを観に行くなど稀で誘われなければ行つてないかもしない。いや、誘われても行つてないかもしない。友人の「有賀」が楽団で演奏すると言つので行く気になつたのです。

樂団の演奏は大したものでした。素晴らしい音楽が目の前で流れトロンボーンを吹く有賀の勇姿に感動したまにはコンサートも良いものだと本氣で思いました。

ところが一度三曲目の中止が終わったあたりでしょうか。私はついに斜め後ろに座る遠子に気づいてしまったのです。

遠子は観衆の中で美しいばかりか清楚な感じがしておりました。それまでに経験したことない

稻妻が体じゅうに走った気がしました。

コンサートは全部で

十曲ほど演奏されました  
私がちゃんと聴いていたのは  
始めの三曲だけで  
四曲目からは斜め後ろに座る  
「遠子」が気になつて  
どんな音楽が鳴っていたのか  
わつぱり覚えていないのです。  
どうしても遠子が見たくて  
仕方なく不自然にならないよう  
一曲の間一回は遠子を見るため  
苦心していました。

驚きだつたのはコンサート終了後の事。  
ロビーの向こうから有賀と遠子が  
肩を並べてやつてきたのです。  
そして更に驚きだつたのは  
遠子が有賀の妹であつた事でした。

私は仲間内で

『オリッヂ』と呼ばれておりました。

『おー！オリッヂ。来てくれたか』  
『あ、ああ。とても良かつた』  
『こちらは、折幸之助君。君  
それからボクの妹の遠子だ』

二人は黙つてお辞儀した。

『メシでも行かないか？

すぐ片してくるから待つてくれ』

有賀はお言い

初対面の二人を残し

楽屋裏へ下がつて行つてしまつたのです。

残された私達は有賀が戻つてくるまで  
殆ど話をしませんでした。

『遅いですね』私がこう言つと

『そうですね』遠子はこう言いました

頭の中で遠子に対する

様々な疑問が駆け巡るのに

なかなか言葉になりません。

それからすぐの事です。

『いやー悪い悪い。じゃ行こうか』

それから3人並んで文化会館の坂を下り  
丸テーブルで3人向かい合わせで

食事をしました。

遠子がトーストグラタンを頼んだので  
私も同じものを頼みました。

(なんて美しい人だろ？…

この人こそ、ボクの生涯

たつた一人の人になるに違ひない！

ボクはもお確信してしまつたぞ)

いつも有賀には無遠慮でいられる私が  
遠子がいるとそつもいきません。  
といひが、心が喜びで満ち溢れ  
ある瞬間から喜びが饒舌な言葉となつて  
口から出てきたのです。

『今日はとびきり良い日だ。

音楽も食べ物も最高じゃないか！

産まれてきて良かつた』

『お？なんだオリッヂ。

大袈裟だな。喰えよ』

有賀はすかさずからかいります。

遠子も笑いました。

それからといふもの

遠子が少しでも笑うと

どうしようもなく幸せで

仕方がありませんでした。

(他人の笑顔はこんなにも幸せなものか)

その晩、私は日記にいつ記しました。

『人生は空かも色即是空かもしれない。  
だが、この喜びは何処からくる?  
喜びを与えられてくれるものに栄えあれ』

私は運命というものがあつても良いと  
その時、本気で思ったのです。  
遠子と出会えたことは運命だと。

そして次の日、私は有賀にとおとお聞いてみたのです。

『ところで君の妹さんはいくつかね?』

『17。まだガキンちよだよ』

『そうか。ボクは18かと思つた

本当は20くらいだと思つていました。

17なら大丈夫だろう。

17なら6つ違ひだ。

ボクが26で偉くなる頃には

遠子は20歳か…

私はそんな事まで考えていたのです。

その日の晩も遠子を思わずには  
いきませんでした。

19 年5月10日

あれから三週間が過ぎた。  
遠子の事が忘れられない。  
忘れられないどころか  
ますます肥大化している気がする。

19 年5月12日

居ても立ってもいられず  
有賀君の家に遊びに行つてきた。  
遠子は居なかつたが  
気になり、心そこには在らず。

有賀君の話を聞き漏らす程だった。

有賀君はボクがうわの空なのに気づき少々ふてくされてしまった様だ。

許せ友よ。

ともかく今日も遠子に会えなかつた。

19 年5月13日

遠子が友達と街を歩いていた。

花束を抱えていたので

華道塾の帰りではないかと思われる。  
不意に目があつたもので

驚きのあまり立ち止まると

遠子が微笑んで御辞儀をしてくれた。  
何か話したかつたが、

またもや言葉にならず。

なんてことだ！

ボクの心は別人の様だ。

どうやら恋をすると体を流れる物質も  
自動的に変わるらしい。

ああ人生は素晴らしい！

ボクの人生には遠子がいる！

神様感謝！

遠子に出会つてからというもの

作曲活動はかつてない程順調でした。

次々と音楽が降ってきたのです。

ところがそのうち

何処かに行かないと

落ち着かない気持ちになり

一番親しい友人、

「鷺谷」のもとを訪ねました。

『家に居ると思つたらやはり居たか』

鷺谷のもとに通つようになつたのは  
19の頃でした。当時の事は  
今でもハツキリ憶えております。

それは私の書く音楽、描く音楽  
周りの音楽家から

叩かれまくつていた時期でした。

既に新進氣鋭の作曲家だつた鷺谷は  
不思議と私の音楽を  
褒めてくれたのです。

そこで私は鷺谷だけの為に  
ソナタを書いて贈りました。  
すると鷺谷は喜んで手紙を  
送り返してよこしたのです。

手紙の末文にはこう書かれてありました。

『最高！暇な時は遊びに来てよ

私は救われた気持ちで

泣きたくなるほど嬉しくなり

恐る恐る鷺谷の家を訪問したのです。

とにかく逢えば気楽な男で

欠点だと思われるところまで

長所だと説いてくれる男でした。

『他人の無責任な言動に一々右往左往してたら落ち着いて生きてけないよ』

私は鷺谷が大好きになりました。

度々、鷺谷と逢うようになつたのです。

鷺谷はいつも喜んで逢つてくれました。  
私達は時に慰め合い、鼓舞し合い  
お互い腹を立てても直ぐ治り  
かえつて友情が増すのを感じていました。  
平気でなんでも言い合える親友。  
親友とは滅多に作れるものではありません。

『いらっしゃい！

ボクは出不精だからね。  
そりや居るに決まってる。  
いつも来てくれて助かるよ』

鷺谷は私を確認すると

奥まった部屋から

レコードをじつそりと持つてきて  
新譜と思われる一枚を丁寧に開き  
優しく針を落とし、  
私に聴かせてくれました。  
これが鷺谷のいつもの  
おもてなしなのです。

『どうだい？』

『えつ！あ、ああ。聴いてる』

真つ先に思い浮かんだのは

遠子の可愛らしい御辞儀姿でした。

『これはエルガーの  
愛の挨拶という曲だよ』

『威風堂々を書いた人かい！？』

『うん。 そうだよ』

『へえ～ 素敵だねえ。 随分柔らかい』

空間は音楽で満たされ  
頭の中は遠子で満たされ  
私はすっかり充実しきっていました。

私は遠子の事を鶯谷に  
話したいと思つていました  
が言つ機会がありませんでした。  
実は言おつかと思うと  
言いたくない気にもなつていたのです。

『紅茶でも飲むかい？』

『うん。 それから…』

さつきの曲、も一度聴きたいな』

『そうだね！ボクも丁度聴きたかつた。

窓、明けてくれないか？』

『了解』

鶯谷は奥まつた部屋から

レモンティーを2つ。

エルガーのレコードを丁寧に扱い、

優しく針を落としました。

瞳をとじて窓からそよぐ  
心地よい風を感じながら  
あの柔らかい音楽が流れました。

(愛の挨拶。…なんて優しい曲なんだ  
人混みの中、ボクは遠子をみつける。  
遠子もボクに気付き微笑みながら  
ゆっくり、こうするのだ…)

『イツチバーン！イーイェイ』  
(つー！？)

愛の挨拶で一番好きな部分の頃合い。  
それこそ一番ウットリする部分でした。  
遠子が可愛らしく御辞儀をする部分。

庭園からキャッキャと

騒がしい声が聞こえてきたのです。

遠子の幻影をかき消された。

私は腹を立て、ギロッと

庭先に目を移すと…

5人程の女子学生が下着姿で  
縄跳び競争をしていました。

最後まで残った女子学生が  
友達の拍手を受けながら

片手を腰。もう片方の手を天にかざし  
さも得意気なポーズをとっていました。

『 じょうがない奴だよ』

鷺谷は呆れて言いました。

私はその時、何の事を言つて いるのか  
さっぱり解りませんでした。

今、あの時の事を

思い出すと笑つてしまします。

遠子と出会つて以来、初めて遠子が  
私の頭から一瞬だけ消えた瞬間でした。

窓の外の景色は

悩み事全部が馬鹿らしく思える程、

脳天氣で無邪氣で明るく

馬鹿馬鹿しい光景だつたのです。

『 おりつちー紅茶こぼしてゐつー』

『 うわ！御免』

鷺谷の家を後にした帰り道。

私は自分の心があまり上品  
ではない事を反省しました。

自分は遠子の夫に値しない

人間かもしれない。

もつと勉強しなければならないと。

私は日本の音楽家を軽蔑していました。

しかしながら自分を顧みると

彼等以上の事は何も出来ていません。

(ホルスト・ラヴェル・ガーシュイン  
世界には嵐が吹きまくつている。

そんな人達の事を思うと

自分が情けなくなる。

嵐の真つ只中で耐えうる力が欲しい！  
そしてその力を与えてくれるのは

遠子さんだ。

遠子さんがボクを頼つてくれることだ。

遠子さんにとつて結婚は

幸せなものでなければならぬ。

遠子さんが喜ばないなら

結婚なんてしない方が良い。

しかし遠子さんはまだ若い。

今之内にボクはもつと

勉強しなければ！勉強だ！勉強！）

（しかし待て。ボクが偉くなる前に  
遠子さんが他の誰かと結婚  
してしまうかも知れない。

遠子さんは美し過ぎるのだ。

遠子を見て心奪われない男が  
いつたい何処にいるだろう。  
有賀君の家に行く友達はかなり多い。  
遠子さんに気付かない訳がない。）

その晩はとても寝つきが悪く

眠りに就いたのは大体午前3時頃  
だったと思います。

次の日も私は鷺谷の家に行きました。  
鷺谷の誕生日が行われたからです。

毎年恒例行事でありますが、  
若い音楽家が集まり、

一発芸などをします。

私は連中があまり好きではないので  
出来れば行きたくなかったのですが  
結局、毎年行って鷺谷を  
祝つてあげたいのです。

19 年5月22日

生涯忘れられない1日になるとは  
思つてもいませんでした。

鷺谷の家に着き、玄関先を通りて入りますと  
すらつとした姿の健康そうな女の子が  
クスクスと笑いながら通り過ぎ振り向き様  
御辞儀をして駆けていきました。

何処かで会った事の

あるような無いような

そんな不思議な気持ちで

誰だか判らぬまま

私も御辞儀を返したのです。

16畳程の広間に踏み入ると

最初に鷺谷と目が合いました。

丁度、他の誰かさんと話をしてましたので

私は目だけで挨拶をしました。

鷺谷もウインクして応えてくれました。

それから周りを見渡すと…

驚いたことに有賀と遠子が

私を発見して手を振つていたのです。

二人を発見した私は本当に  
心臓が口から飛び出す思いでした。  
ほんのり薄化粧をした  
桃色の晴れ着に包まれた遠子は  
まるで神が地上に遣わした  
女神様の様でした。

『なんで来てるの?』

『なんでって…呼ばれたからじゃないか。  
鷺谷が今度ウチの楽団で執るから  
クラブ代表で呼ばれたんだ。』

遠子も来たがつてたから連れてきた

『ツレテキタ！？』

『私、昨日も来てましたのよ』

遠子はピョコリと顔を出し  
天使の微笑みを備えた  
意味深な言葉で私の頭の中を  
一層混乱させました。

『キノウモ！？』

不思議の国に迷い込んだ  
アリスになつた気分でした。

『さーおひつちも座りつ。

せつかくの御馳走を田の前にして  
食べないのは大罪だぞ』

有賀は手を叩きながら言いました。

遠子を目の前にして何も話さないのは

大罪だぞ！と言い返して

やろうかと思いましたが

如何せん有賀は何も知らない人です。

とにかく新参者の有賀は

馴染み有る私と座りたがりました。机には寿司やらサンドイッチやら

フルーツやらが一通り用意されており、

おつまみと麦酒瓶も配られました。

私はそれらが全く見えておりませんでした。

ひたすら気になつたのは

遠子の不思議な言動と

遠子がこんな男だらけの

場所に来てしまつた事。

遠子の座る隣の席が

一つだけ空いている事。

私はひたすら気にしていました。

『ねえ有賀君。ボク一番端に移ろうか？』

『駄目駄目。知らない奴が

隣に来たら困つてしまふよ』

『でも、遠子さんの隣に

知らない人が座るよ』

『ダイジョブダイジョブ』有賀は苦笑した。

『大丈夫じゃないと思うよ』

私は必死になりました。

（有賀君は何も判っちゃいない！

ここは今まさに

狼の巣窟の様な場所だ！

君は連中の浮ついた性根を知らないんだ！

音楽家は坊ちゃん貴族の放蕩者だらけだ！

有賀くんはどうして

遠子さんを連れてきたんだ。

遠子さんの身にもしもの事が

あつたらどお責任をとつてくれるのだー( )

『な。遠子。大丈夫だよな?』

『え? なに?』

『おりつちがそっちに行きた…』

『遠子さん! ボボクそっちに行こうか?』

『え? ここ?』

『うん。 ソコ! そこ

知らない人が来たら嫌だよね?』

『じゃ詰める?』 有賀が遠子に訊いた。

『そうだね！名案だ！天才！

有賀君天才！詰めよう！』

私は大賛成でした。

『んーん。 ここ予約席なの』

『え?』

(予約席なの… 予約席なの… 予約席なの?)

…バスン!

『おまたせ

『おかげり』

程なくして遠子の隣、予約席とやらに

誰かが勢いよく座りました。

あまりの勢いのよさに私はパンを詰まらせてしまつかと思いました。

(「いつたい、どんな人が座つたんだろう?」)

私は遠子より向こうをギロつと眺めました。

…座つたのは女の子だったのです。

(あの子は遠子の知り合いか?  
同じくらいの歳…クラスメイト?  
といつても遠子に比べたら  
薔の様な女の子じゃないか。  
にしても何処かで会つたことの  
あるような無いよつた。  
そういうえば玄関先ですれ違つた女の子は  
この「ではないか」  
よく見ると鷺谷の顔に少し似ておりました。  
そして私はまたアレコレと考えたのです。

(そういえば鷺谷は

妹さんがいると言つていた。

ボクの書く曲が好きだと  
言つていた気がする。

鷺谷の妹は美しいと聞いた事もあるぞ。  
…まあ確かに美人の素養はあるだろう。  
でも遠子さんに比べたら幼すぎる。  
しかし鷺谷の妹さんだとしたら…  
なぜ今まで会わなかつたんだろう?  
鷺谷の妹さんではないだろう。  
やつぱり似てないじゃないか。

鷺谷の妹さんでもないとしたら…

この子はなつたい何者なんだ？

というより何故こんなに

この子を気にしているのだ。

遠子さんだ。遠子さんを愛しているからだ。

あの子は遠子さんの友達で

鷺谷の妹さんで

遠子さんは昨日も来ていた？

：そんなはずない。

昨日はボクも来ていたんだ。

ボクが遠子さんに

気付かないはずないだろう。

だから遠子さんは来ていない。

少なくとも昨日は来ていない（）

私は考へてゐるうちに

何がなんだか訳が

解らなくなつていきました。

『それにも鷺谷君は

大したものだね。僕等より3つ上で、  
もお一流作家とは…羨ましい限りだよ』

私は鷺谷が誉められるのを誇らしく感じ、  
同時に心細くも感じました。

『少し話してみたんだが彼は

随分と頭もしつかりしてる人だった

『しつかりしてるね』

『それに家にはお金もあるから

鬼に金棒じゃないか』

『ちがいない』

私はなんとなく鷺谷の事を  
誉めたくありませんでした。  
しかし、『誉めなければ  
悪いような気がしたのです。

『実際、鷺谷は日本で一番有望な  
作家だと思う。

今にきっと日本だけではなく  
世界でも活躍してくれるはずだよ』  
なんとなく口と心が  
別のような気がしました。

『でも、人間わからないからね。  
ああいう人ほど腹黒いかもしれん』  
有賀は腕組みしながら笑いました。

「冗談でも私はその一言に  
憤りを感じてしまいました。

『それは違う！鷺谷は善い奴だよ。  
あれほど気持ちの良い人間は他に  
居ないんじやないかつてくらいね。  
買い被るつもりはないけど  
ボクは大好きだ！』

『おりつちがそこまで言つなら本当だね。

だつて君。人間嫌いじゃないか  
『人間嫌いって訳じやない。

ボクは性根の腐った奴が嫌いなんだ。  
世の中、残酷な人間が多すぎる！

いつも損しないように生きてる奴も嫌いだ。  
人間面白みがなければ

『なら君はどんな人が好きなんだ？  
有賀は妙にニヤニヤしていました。  
その表情で一気に恥ずかしくなり  
思い切つて『妹さんのようななかた』  
と語りたくなりました。

『ボクは正義感が強くて  
自分のしつかりとした意思を持ち  
それを貫き通す人が好きだ！』

私が話し終えると、

遠子の笑い声が聞こえてきました。  
謎の女の子は手を叩いて笑っています。  
私が話しているのを聞いて笑ったのでは  
と思い、一瞬心配になりましたが  
どうやら誕生日パーティー恒例の  
余興が始まったようです。

余興は順番にやる事になつておりました。  
前の年は一曲弾いてやり過ごしましたが  
今年は断れば良いと腹を据えて来たのです。  
ところが誰一人として  
断る人はいませんでした。

(遠子が見ている中

出来るはずない。絶対やるものか。  
目立ちたいのか？  
ボクはそんなの興味ない)

そして遂に私にも指名が下ったのです。

私は恐る恐る立ち、中央へと進みました。

『えー、折 幸之助です。』

残念ながらボクは

何も用意してきておりません。

どうかお許し下さい。

鶯谷柳「誕生日おめでとう!」

やお言ひ、もと居た席に戻りました。

ヒロが皆は承知してくれず

やすやすとさとめられてしまつたのです。

遠子が気になつて、田をやると

遠子は心配そうな田で

ばかりをじつと見つめていました。

私の顔は熱くなり閉口し、

何かやれたらやりたいと思いましたが

何も面白い事は浮かんできませんでした。

すると誰かが『腹芸をしろ』と叫び。

皆が笑いました。

私に好意を持つていらない連中は

ことさら私を責めて楽しむのです。

遠子は笑つた連中を睨んでいました。

(愛しい遠子さん。

君はそんな表情も出来るのか)

『ありがとうー。おつつか。

おつしちはやらなくて良かつたんだ  
皆に言ひのきれてたね』

鷺谷がスッと立ち上がり拍手をしました。  
おどけてやり過げたと思つたのでしょうか。

それでも連中は

『鷺谷君。駄目じゃないか。

先例が出来ると良くない』

私はますます閉口し

額から汗が出てきました。

『じりさないでやれよ』

連中は声を揃えて言います。

すると

私が歩いてきた方向から  
私の立っていた場所まで  
スタスマ走ってきた人がいました。

『私が変わりにやるー。』

私は田を点にして驚きました。

皆も思わず援護に驚いた様子でした。

『私じゃいけませんことっ。』

それは遠子の隣に座った  
謎の女の子だつたのです。  
集まつた皆が手を叩いて喜びました。  
『良すぎるとー。』『頑張れー。』

『一重跳び10回』

彼女はポツリと呟きました。

どつと笑いが起こり

彼女は振袖から縄跳びをサッと取り出し  
実際に見事な一重跳びを披露したのでした。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10！

皆、一緒になつて10数えました。

『もいつちょ』

彼女は3跳びサービスしました。

私は彼女が顔を火照らせ  
すぐ隣で跳んでる姿を見て、  
泣きたくなるほど感激が  
込み上げたのを今でも忘れません。

『どんなもんかい』

片手を腰。もお片方の手を天にかざし  
彼女は得意気なポーズをとりました。  
笑顔は爽やかに輝いていました。

大拍手喝采！！

それから鷺谷も驚いて言いました。

『おてんばなつちゃんは

何処でそんなの覚えたんだ？』

『知らないわよ！』

彼女はわざと乱暴に言いました。

その表情がたまらなく可愛らしくて

仕方がありました。皆が一斉に笑いました。

『それだけ出来ればメシが喰える』

『訳ないでしょ！』

彼女は鷺谷を睨みつけました。

また更に笑いが起こり…

『行きましょ。先生』

彼女は私の手を引っ張り、元居た席へと戻つたのです。

そして鷺谷は皆に言いました。

『紹介します！今のが

ボクの可愛い妹、鷺谷夏海です！

先日、よみがへく帰還しました。

以後よろしく御願いします』

鷺谷は皆に深々と御辞儀をしました。

その時、その日一番の

大拍手が起こつた氣がします。

お世辞ではなく

皆が彼女を歓迎している様でした。

私の御陰で白けてしまつた空気が

彼女が現れ一変、

明るく元気になつたのです。

気がつけば

謎はすべて解けていました。

こうして

私と「夏海」は出逢ってしまったのです。

第壱部 出逢い  
… 閉幕

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2800m/>

---

激情

2010年10月26日08時15分発行